HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地球規模での市民参加におけるファシリテーターの役割 ： 地球温暖化に関する世界市民会議（WWViews）を事例として
Author(s)	三上, 直之
Description	小特集　World Wide Views
Citation	科学技術コミュニケーション, 7, 19-32
Issue Date	2010-02
DOI	https://doi.org/10.14943/43263
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42647
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC7_003.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論文

地球規模での市民参加におけるファシリテーターの役割

～地球温暖化に関する世界市民会議（WWViews）を事例として～

三上 直之

The Role of Facilitators in Global-Scale Public Participation Exercises : A Case Study on World Wide Views on Global Warming

MIKAMI Naoyuki

Abstract

This paper discusses the issues about facilitation of public participation meetings, taking World Wide Views on Global Warming (WWViews) as an example. Held in 38 countries around the world on the same day in September 2009, WWViews was an unprecedented challenge of science communication. In each country, 100 ordinary citizens were invited and divided into small groups to deliberate on difficult questions about global climate change in an internationally uniformed method. After the event, we conducted inquiry surveys aimed at both the participants and facilitators who joined in the Japanese meeting of WWViews in order to examine how effectively the participating citizens were facilitated in the deliberation process. The overall evaluation by the participants was high, especially with a high satisfaction level of group facilitation and meeting procedure. However, some participants had difficulty in feeling something familiar to the discussion topics relevant to current international negotiation, such as short-term reduction targets of green house gases and the frameworks of assistance to developing countries. The facilitators also reported in the post-event survey that they found it difficult to bridge the gap between the interests of participants and the agenda, mainly because of the uniformed rule to strictly require the facilitators of neutrality and prohibit them from giving additional information to the participants. Impartialness of facilitators is an essential requirement for deliberative exercises, but applying too strict rules would work negatively. Instead of confining the facilitators to a narrow role of "neutral chairpersons," it is necessary to regard facilitators as "experts of mediation" and let them actively serve as interpreters between the everyday life of participating citizens and the world of international negotiations.

Keywords: World Wide Views, WWViews, facilitation, facilitator, global warming

1. はじめに

本稿の課題は，2009年9月26日に世界38カ国で開催された「地球温暖化に関する世界市民会議」World Wide Views（WWViews）[1)]について，日本会場（京都市）での会議のファシリテーションに

2010年1月8日受付　2010年1月25日受理
所　属：北海道大学高等教育機能開発総合センター

焦点を当て，科学技術コミュニケーションの視点から検討することである．

ファシリテーションは，複数の人間が討論や意志決定，学習，共同制作などを行おうとする際，そのプロセスに働きかけることによって，グループでの作業や議論を促進する支援の営みである．まちづくりや環境学習，教育，ビジネスなど幅広い分野でその重要性が広く指摘されてきており，各種のワークショップや会議のファシリテーションの技法について解説する書物も，多く出版されている[2)]．

科学技術コミュニケーションの分野でファシリテーションが主に問題とされてきたのは，研究者や市民が直接対話するイベントの場面である．サイエンスカフェに関する議論では，話題提供者となる研究者と一般の参加者との間に双方向的なやり取りを生み出すために，場を整えるファシリテーターの重要性が強調されてきた（北海道大学CoSTEP編著 2007, 123-4; 松田 2008, 9）．社会的論争を含む科学技術の話題について市民が専門家と対話しながら議論をし提言をまとめるコンセンサス会議に関しても，市民参加者による議論や提言作成を支援するファシリテーションや，進行役としてそれを主に担うファシリテーターのあり方が論じられてきた[3)]．このような研究はあるものの，科学技術コミュニケーションの分野に特徴的なファシリテーション上の課題について，いまだ十分に議論が尽くされているとは言えないだろう．

一方で，市民参加型会議や参加型テクノロジーアセスメントの研究が先行している西欧圏では，コンセンサス会議を始めとする参加型手法を用いた市民参加実践への評価に関する議論は，科学技術の分野に限っても相当の蓄積がある[4)]．けれども，やはりファシリテーションのあり方については，会議に対する総合的な評価の中で，参加者から意見を引き出す上で積極的なファシリテーションの有無が鍵になることを指摘したもの（Rowe and Frewer 2005, 269, 273）がある程度で，本格的な検討は見当たらない．

この分野に特徴的なファシリテーション上の課題とは何か．その一つとして，本稿で焦点を当てたいのは，テクノロジーの普及により，国境を越えて地球規模での広がりを見せる環境や健康などのリスクをめぐる問題について，科学技術コミュニケーションを行う場面である．こうしたリスクへの対処は，それぞれの分野の専門家によってすでに国際的に行われてきていることが多い．国連のもとで交渉が進められている気候変動問題への対応は，その顕著な例である．それら専門家や政策決定者による国際的な議論の空間と，実際に環境や健康面でのリスクを受けることになる一人ひとりの市民の生活世界とを橋渡しすることは，科学技術コミュニケーションの重要な役割であろう[5)]．

本稿では，2009年12月の国連の「気候変動枠組条約締約国会議」（COP15）の交渉に世界の市民の声を届けることを目的として行われたWWViewsを事例に，そうした橋渡しを可能にするファシリテーション，ファシリテーターのあり方について考察する．

2. 課題と方法

本稿で対象とするWWViewsは，地球温暖化，とりわけ各国の排出削減目標や途上国支援の枠組みといった，目下の国際交渉の焦点となっている問題群をテーマとした市民会議であった．これらのテーマは，つきつめれば我々の日々の生活に深く関わる問題ではあるが，日本の生活者にとって必ずしも身近なものとして感じられないトピックであると言えよう．しかも，これは単一の分野に限定されない広がりを持つ話題である．議論の前提として踏まえるべき知識・情報は，気候変動に関する自然科学の研究成果だけではなく，国際交渉や政治経済に関する理解まで広範にわたる．WWViewsのテーマ設定は，参加者にとっても，運営側にとっても，きわめて難易度の高いものであったと言える．

「難易度の高いテーマ」を扱うということに加えて，WWViewsには，さらに二つのハードルがあった．一つは，参加者として，年代，職業，居住地域，学歴が多様で，地球温暖化の問題について専門知識や明確な意見を持たない「ふつうの市民」を意図的に集めたことである．「難易度の高いテーマ」について「ふつうの市民」が議論すること自体は，これまでも国・地域レベルでは，コンセンサス会議などの形で行われてきたが，今回の会議には，もう一つの条件があった．それは，各国共通のマニュアルを用いて，「国際的に統一された手法」で行うことである．38カ国での会議全体を統轄するデンマーク技術委員会（DBT）が中心となって，市民参加者の集め方や会議の時間割，当日のファシリテーターやスタッフの役割，広報や政策決定者へのアプローチ方法に至るまで，会議運営のあらゆる側面について記したマニュアル（A4判64ページ，英語）が作成された．各参加国はこれに厳密に沿ってイベントを開催することを求められた．情報提供資料（冊子およびビデオで構成）と，投票の際に用いる質問も全て共通であった．各国間での結果の比較可能性を高め，地球温暖化をめぐる国際交渉や報道にインパクトを与える，というのがその意図であった．

「難易度の高いテーマ」について，「ふつうの市民」が「国際的に統一された手法」で議論する．この三つが揃ったところに，WWViewsの，科学技術コミュニケーション活動としての新規性がある．

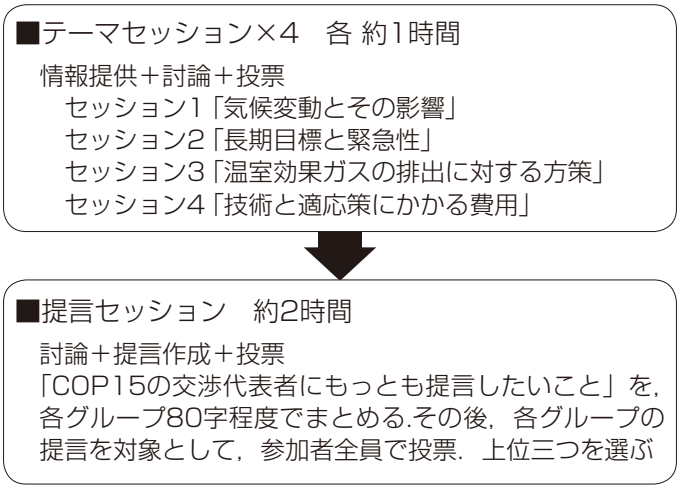

図1　WWViewsの議論の流れ

WWViewsの会議は，世界共通のプログラムに沿って，四つの「テーマセッション」（各約1時間）と，それに続く「提言セッション」（約2時間）という五つのセッションを，朝から夕方まで，約8時間かけて行うものであった（図1）．テーマセッションは，「気候変動とその影響」や「温室効果ガス排出への対応」など，セッションごとに決められたテーマについて40～50分間，自由に意見交換した後で，テーマに関する2～4問の質問（選択式）に対して参加者個人が投票する形で進行した．最後の提言セッションでは，テーマセッションでの意見交換を踏まえてさらに議論し，COP15に集まる世界の交渉代表者に最も提言したいことを，グループごとに70～85字程度（タイトルを含む）でまとめた．

WWViewsでは，世界38カ国44の会場で，それぞれ約100人ずつ（日本では105人）が参加したが，約100人全員で行ったのは，進行方法の説明や，セッション冒頭での情報提供ビデオの視聴，セッション末の投票結果の集計・発表のみである．実質的な議論はほぼ全て5～6人程度の小グループに分かれて進められた．会議のプログラムや進行ルール，情報提供資料（資料集とビデオ）は世界共通のものを使用したから，イベントの大枠はそれらに規定されていた．その上で，参加者の意見形成や判断に最も大きく影響したのは，グループ内の議論進行，ファシリテーションのあり方であったと

言えよう.

グループごとの議論進行を担当したのは，各国の運営者（日本では大阪大学，上智大学，北海道大学CoSTEPなどでつくるWWViews in JAPAN実行委員会）が選任したファシリテーターである．その選任基準についても，あらかじめ定められた統一ルールがあった.

- 自分の意見を主張することなく，参加者が意見を述べるのを支援するという基本的役割を理解し，受け入れていること（ファシリテーターは情報提供資料の内容以外の解説，情報提供を行ってはいけない）.
- 参加者から見て，中立であること．地球温暖化関連の問題について特定の立場を持つ組織のメンバーは不適当である.
- 地球温暖化関連の問題の専門家でないこと.
- 事前に研修を受け，議論のルールに関して理解しておくこと.

日本での会議の場合，まちづくりや環境学習などの分野で職業としてファシリテーションを行っている人や，科学技術コミュニケーションの教育を受け，市民参加型会議の進行の経験がある人，科学技術社会論や関連する分野の研究者など，上記の条件を満たす20人（うち2名は補欠）[6] を，実行委員のネットワークでリクルートした．当日はこのファシリテーターが18のグループに一人ずつ入り，五つのセッションの進行を行った.

それでは，WWViewsでのファシリテーションは，「ふつうの市民」が「難易度の高いテーマ」に取り組むのを「容易にする（facilitate）」ことにどれほど成功したのであろうか.「国際的に統一された手法」はうまく機能したのであろうか．うまくいかなかった部分があるとすれば，それはどこであり，何を改善すれば良いのであろうか．本稿ではこれらの点を，日本会場での会議運営・進行の実態に即して検討する.

こうした課題に取り組む場合，録音や録画のデータに基づき発話を分析する方法が考えられる．ただ，今回は，参加者が発言しにくくなることを避けるため，録音･録画による記録は行わなかった.

代わりに本稿での検討は，会議終了後，参加者およびファシリテーターから受け取った事後評価に基づいて行う．参加者に関しては，会議終了後，105人全員の自宅に質問紙を送り，WWViewsに参加した感想や会議運営への評価について，94人から回答を得た．このうち本稿では，会議進行に関わる結果を使用する．ファシリテーターに関しては，会議終了直後に，実行委員会へメールでWWViewsの企画運営全般に関する感想（様式自由）を送ってもらった．本稿ではこの中から，会議進行に関わる部分を抜粋して用いる.

3. 参加者による評価

3.1. 会議全体の進行について

初めに，会議全体の進行に対する参加者の評価を見てみる．WWViews in JAPAN実行委員会が，参加者全員を対象として事後に行った質問紙調査（回答者数94人）では，「WWViews会議当日の全体の進行については，どのようにお感じになられましたか」という質問に対して，「非常に適切だった」から「まったく適切ではなかった」までの5段階で評価してもらった．その結果，「非常に適切だった」37.2%（35人），「やや適切だった」48.9%（46人）と，回答者の8割以上が適切であったと答えた.

会議全体の進行に関して参加者が問題だと感じた点は，多くが時間に関することである．質問紙調査では「議論の進め方」と「会議当日の運営」とに分けて，感じたことや気づいたことを自由に記述してもらった．これら二つの設問を通じて，計22人が時間の問題に言及している.「全体的に時間が少ないように感じた」(20代男性),「〔提言セッションは〕もう少し話し合いの時間がほしかった」

（40代男性）など，時間の不足を指摘する意見がある一方で，「朝から夕方までびっしりあるのは疲れた」（20代女性），「拘束時間が長い」（20代女性，30代男性）などと，会議全体の時間の長さを指摘するものも目立った．

四つの異なるテーマについてグループディスカッションと投票を繰り返し，最後に正味1時間程度で提言文をまとめる，というスケジュールは確かにハードなものである．「道標の多い路を，その通りに歩かされた感想．寄道をしたかった」（60代男性）との記述もあった．時間不足と拘束時間の長さという一見対立した指摘は，こうした負担感について述べたものと言えよう．この種の会議で踏み込んだ議論を目指す以上，参加者にある程度の負担を求めることはやむを得ない面があるが，プログラムを効率化したり，休憩を増やしたりするなど，参加者の負担を軽減する方法を追求する余地がある．

3.2. グループ討論の進行について

それでは，各グループでの議論の進行について，参加者はどのように評価しているであろうか．質問紙調査では，「会議当日，あなたが着席されたテーブルのファシリテーション（議論の進行）は適切に行われたと思われましたか」という設問に対して，同じく5段階で評価をしてもらった．先の進行全体についての問いと比べても，さらに評価が高く，60.6%（57人）が「非常に適切だった」と評価した．「やや適切だった」とした29.8%（28人）と合わせると，約9割の人がグループ討論の進行を肯定的に捉えている．自由記述欄への回答でも，ほぼ全グループの参加者から，ファシリテーターの進行の適切さや，参加者への気配りについて，高く評価するコメントが寄せられている．参加者の評価によれば，今回のグループワークの進行は全体として，地球温暖化に関する取り組みにくいテーマについての議論を「容易にする」ことに成功したと言えるであろう．

表1　ファシリテーターからの積極的な発言を求める参加者の意見

参加者	意　　見
20代男性	ファシリテーションの人が，もっと意見を戦わせるべきだった
30代男性	途中途中でグループのリーダー？のような人が中心になって話を全体で始めたら，また違う方向や，深い意見や，一方向的な新しい提言ができるかも／ファシリテーションはすばらしく中立の立場で物言〔ママ〕を進行していたが，もう少し人の意見の具体的さ〔ママ〕や，要約ができるとよかった
30代男性	ファシリテーターという制度が初めてだったので，ファシリテーターの方が意見を言う事はできないというのは驚いた．誰かしらが会話において，テーマ毎において，方向性を示す必要があったと感じた
30代男性	難しい問題なので，グループ全員あまり発言出来なかった．進行役の方も固まっていたが，少しぐらい進行役の方にも発言してもらっても良いかなと感じた
30代女性	ファシリテーター〔中略〕の説明は的確だったと思いますが，もう少しいろんな話題などを投げかけて欲しかった
60代女性	ファシリテーションの立場からテーマについての質問に対して詳しく説明すると意見につながるかとの思慮からか，ポイントが理解しにくい一面もあった
60代男性	進行役の方が，もう少しヒントとか事例とか言ってもらった方が良かった
60代女性	提言の書き方，アピール度もリードしてほしかった

（事後の質問紙調査の自由記述回答から抜粋）

自由記述の中でグループでの議論進行について指摘された問題は,「ファシリテーターも情報提供や意見の提示を積極的にしてほしかった」という点 (表1) に集中している.

ファシリテーターに追加の情報提供や意見の提示を求めることは，今回のルールから見れば逸脱である．これらのコメントは，本来ファシリテーターに対するものではなく，会議の基本設計に向けられた注文だと言うべきかもしれない.

ただ,「進行役の方が，議論がつまった時さりげなくサポートして良かった」(50代男性),「進行役の方がうまくリードしてくれて，リラックスして意見が言えた」(60代男性) などと述べている参加者も少なくない．その意味で，ファシリテーターのさじ加減の問題という側面もある．そして,このさじ加減に関しては,ファシリテーターによる事後評価(感想文)でもさかんに触れられている．次章でその内容を見ながら，さらに検討を進めよう.

4. ファシリテーターから見たグループ討論の進行

4.1. 参加者への情報提供

あるファシリテーターは，途上国支援のための基金をテーマとした第4セッションの議論を，次のように振り返った.「現在の途上国支援のスキームがどういうものでその成果と課題がなんであるのか？　なぜ『基金』方式が提唱されているのか？　このあたりこそ，ビデオで示されないと，議論を深めることにはつながらない」(Aさん)．こうした前提が共有されていないために，このグループでは「〔基金を〕『つくったらええやん』的な流れ」(Aさん) になってしまい，それ以上議論が深まらなかったという.

別のファシリテーターは,各テーマセッションの冒頭で上映した情報提供ビデオが分かりやすく,参加者から好評を得ていたとしながら,「資料集の中では明記されている数字 (ビデオでは具体的に扱っていない部分) などに対する，ファシリテーターとしてのさじ加減が難しく，どこまで情報を提示するか迷う場面はあった」(Bさん) と述べた．また「議論に役立つと思われる自分の知見を自由に述べられないことを残念に感じる場面は何度かあった」(Cさん) という感想もあった.

一方で，より積極的に情報提供を試みたファシリテーターもいる．Dさんは「ところどころで議論が行き詰まることがあり，以下の点については多少インプットが必要だった場面がありました.これは，全体で共有することができればよかったと思う」とし，具体的には，ポスト京都議定書に関する議論の経緯や，そもそも国際交渉とはどんなものであるかという基礎知識，気候変動に関する国際交渉と，国内政策や市民生活とのつながり，エネルギー構成と二酸化炭素排出の関係などの点を挙げている．いずれも，参加者に事前送付された資料集や当日上映されたビデオでほとんど触れられていないか，触れられていても実質的な解説は無かった点である．こうした前提が共有されなければ，排出削減目標や途上国への資金提供の枠組みなどについて，参加者が議論や意見の表明をすることはできない，というわけである.

他にも,「テキスト〔資料集〕を読んでこなかった方に関しては，テーブルファシリテーターの十分なナビゲートが必要であった」(Eさん) と，情報提供を補足する対応をしたファシリテーターもいた.

とは言え,これらの対応も,広い意味では情報提供資料の範囲内(したがって統一ルールの範囲内)の話である．そのため,「非常に複雑な内容であるのに，資料に書いてあること以外解説できない,というところが辛かった」「情報提供できないことで市民感覚 (各人の経験や具体的イメージ) と接続させてあげられなかった」(Dさん) という不全感が残ることになったのである.

4.2. 参加者とテーマの距離

こうして，ファシリテーターからも参加者からも，情報提供のありようが問題とされるのは，なぜであろうか．ファシリテーターによる事後評価から示唆されるのは，今回の会議のテーマが，多くの参加者にとって自らの生活とはかけ離れたものと感じられ，自分の問題として捉えにくかったという実態である．

少なくとも会議のすべり出しは順調であった．第1セッションは，気候変動とその影響について概説した資料をもとに，各自の感想や情報を持ち寄るという内容だったからである．「『私たちは何ができるの？しなきゃいけないの？』というモードでの参加者が多く」（Aさん），「〔第1セッションの投票での〕『不安かどうか』という最も自分から距離の短い問いも参加者にはヒットした」（Fさん）という．

ところが第2セッション以降，会議は，長期目標や対策の緊急性，温室効果ガスの排出に対する方策，技術移転や資金援助などの各論に入っていく．すると，「自分たちの関心の強い『自分がどうするか？』から離れていくので，議論からもひいていく感じは否めず」（Aさん），「どんどん問いが参加者から離れていく感じがあった」（Fさん）という．同一のセッションの中でも，「例えば最近の天候について，また子どもの頃との気象環境の違い等，実感が伴う話ならば活発に話がでるが，そこから視点をグローバルなものに移すと『わからない』もしくは『質問』になってしまう傾向があった」（Gさん）．

参加者が回答を求められた質問は，気温上昇に関する長期目標や，温室効果ガスの排出削減目標にせよ，途上国支援の枠組みにせよ，目下の国際交渉の主題そのものである．こうした質問について，グループでの議論は，そもそも「何を問われているのか分からない，というところから始まってしまう〔中略〕．分からないから議論が脱線してしまうことも多く，セッションの議論の範囲と設問の趣旨を何度も確認しました．従って，選択肢の間の違いまで共有するには至りませんでした」（Dさん）という状況にあった．

この問題が最も顕著に現われたのが，会議最終盤の提言セッションであった．このセッションにおいて各グループに投げかけられた質問は，次のようなものであった．

「本日のWWViewsでの議論を踏まえ，COP15の交渉代表者にもっとも提言したいことは何ですか．提言は短く，具体的に書いてください．（タイトルは10～15字程度，本文は60～70字程度）」（下線は筆者）

対象が「自国の交渉代表者に」であれば，まだ答えやすかったかもしれない．しかしここで求められたのは，12月にデンマークで開かれる国連の会議（COP15）に世界から集まる代表者全体に向けての提言であった．WWViewsの結果は，各国レベルで個別に政府関係者，COP交渉担当者に伝えられるにせよ，第一義的にはCOP15の会場に直接届けられることが想定されていたからである．

表2　日本会場で投票によって選ばれた上位三つの提言

	提　　言	得票数
1	「地球がカゼをひいています！」 熱があと2℃上がると重症になります。私達は治し方を学び、世界の人々に広めます。皆で知恵を出し合って、経済的に、技術的に協力し合って治しましょう。	31
2	「気候変動問題に国境なし」 先進国は舵取役としての責任を。途上国（高排出国）には理解と協調を。地球人として、地球のあるべき姿を未来に残そう。	28
3	「ひとりひとりができること」 先進国と途上国が互いに尊重し合える新しい枠組の中で、世界中の人々が情報共有できる場づくりを実現し、一人一人が自ら取り組める目標づくりを行うこと。	25

各グループで提言をまとめる時間は，正味1時間に限られており，多少時間を超過するグループもあったが，最終的には18グループ全てが提言の完成にこぎ着けた．ただ，参加者への事後の質問紙調査で，提言についての評価を聞くと，自分自身のグループの提言内容について「非常に満足」としているのは41.5%（39人）にとどまった．「やや満足」とした40.4%（38人）を加えると約8割が満足しているとも言えるが，2割近い人が「どちらともいえない」「やや不満」「非常に不満」と答えたという結果は無視できない．全18グループの提言の中から全体での投票（各自，18個の中から三つまでを選択）によって選ばれた提言（表2）への満足度は，さらに下がる．「非常に満足」としたのは27.7%（26人）にとどまり，「どちらともいえない」が19.1%（18人），「やや不満」「非常に不満」が合わせて14.9%（14人）に上っている．

その理由を質問紙の自由記述欄に探ると，提言に不満を感じると答えた参加者は，日本の会場で選ばれた提言が「標語」や「スローガン」のようであり，具体性に欠け，訴える力も弱いものであったと述べている[7]．

「具体的さや独創的な意見がなく，提言はスローガンにしかならなかったことと，具体的な行動のプランが作り出せなかったこと」（30代男性）

「提言は標語ではなく，もっと具体的なものに仕上げたかった（クリーンエネルギーの普及を最優先にすべき，など）．せっかく市民がいま必要だと思うことについて議論して，考えもまとまったのに，どこでも言われているような標語を提言してもあまり意味がない」（20代女性）

こうした評価は，ファシリテーターの印象とも照応している．提言セッションでは「最後は発言された重要なキーワードをつなぎ合わせることに終始してしまい，文章全体としての流れチェックなどの時間がとれず，やや半煮え感を残したままになってしまった」（Hさん），「提言文章に加工する過程で，無難な言葉に集約されてしまった」（Gさん）など，参加者の発言のキーワードを使って文章を作成するのに時間を取られたようである．必然的に，中身について突っ込んだ議論することはできなかったと思われる．

さらに「時間が長くなったとしても，多少言い回しが整う程度で，内容に差はでなかったかなと思う」（Gさん）との意見もあった．このファシリテーターによれば，「資料の読み込みや理解力不足というよりは，情報に対して問題意識が持てるかどうか？情報の後ろにある背景にも視点が及ぶかどうか？」（Gさん）に本当の問題がある，というのである．別のグループのファシリテーターも，「国レベルでの『日本はこうすべきだ』『国はこうしてほしい』という意見や要望は出ても，COP15という場までは『わからない，想像がつかない』と〔参加者から〕いわれた」（Iさん）という．

グループや参加者によって，実態は大きく異なっていたであろう．情報提供資料や質問を深く理解した上で議論をし，自らの結論を導きだした参加者も少なくなかったはずである．だが，ファシ

リテーターが再現しているグループ討論の模様は，先に見た，「ファシリテーターも情報提供や意見の提示を積極的にしてほしかった」という参加者の感想と符合している．今回のWWViewsのテーマは日本の参加者にとって取り組みにくいものであり，情報提供のあり方を含めて，参加者への支援は必ずしも十分ではなかったと言える．

5. 考えられる改善策

前章までに見た問題点に対して，会議設計や運営の面で，いくつかの改善策を考えてみることはできる．

まず思いつくのは，情報提供資料や質問をある程度日本（各国）の事情に合わせてローカライズすることである．排出削減目標や途上国支援の枠組みなどの選択が，日本に暮らす我々の生活や，国内政策とどう関わっているかが示されれば，参加者は，今回のテーマをもう少し身近な問題として捉えやすかったであろう．

会議当日に情報提供者を導入することも考えられる．資料集と映像の内容についての質問や，ディスカッションの途中で浮かんだ疑問について答えるため，関連する分野の複数の専門家が会場に待機する．これにより，不確かな情報をもとに，疑問を抱きつつ議論を進める事態をある程度は回避しうる．

そして，進行に関する事前の案内をもう少し詳しく，念入りに行うことである．参加者からは「最初から提言を作ることを強く頭に置いて議論したかった」（60代女性）という意見があった．ファシリテーターの事後評価でも，「〔参加者は〕今ひとつ『何をするのか』がわかっていらっしゃらなかった」（Bさん），「参加者は何をするのかのイメージが曖昧で心の準備ができていない」（Aさん）など，進行方法や参加者の役割が参加者自身に十分浸透していなかった可能性が示唆された．質問文も当日まで非公開であり，参加者にも当日に初めて示されたのであるが，この点，参加者には事前に（せめて前日までに）質問を渡して目を通してもらうとよいのではないか．進行方法についての詳しい説明と質問の提示があれば，前もって資料集を読む上でも焦点が絞りやすかっただろうし，最後の提言に対する準備も可能になったと思われる．

しかし，国際的に統一された設計・ルールで開催するというWWViewsの基本的な性格を考えると，これらの改善策には限界がある．情報提供資料や質問をローカライズしすぎれば，各国の実施条件が異なることになり，結果を国際比較することも難しくなる．情報提供者の導入に関しても同様である．国によっては十分な専門家を得られないケースもあるだろうし，専門家が前面に出過ぎると参加者が自由に議論を行えなくなる危険性もある．各国での実施条件を揃えるという観点からすれば，情報提供資料をローカライズする以上の問題が伴うかもしれない．進行プログラムや質問文の事前提供については，今回のWWViewsでは，参加者に対する外部からの圧力や誘導を回避する観点から，当日まで基本的に非公開とされたという事情がある．この事情を全く無視できるかという問題もある．そもそも，質問が事前に配付されたとしても，それだけで直ちに参加者にとってテーマが身近に感じられるわけではない．

6. 考察

6.1. WWViewsのトリレンマ

以上のように考えると，「難しい問題」について「ふつうの市民」が「国際的に統一された手法」で議論するという条件が，同時に満たすのが難しいトリレンマの関係にあることに改めて気づかされ

る．参加者が議論のテーマを身近に感じられるように，情報資料を各国の事情に合わせて補訂したり，国ごとに情報提供者を導入したり，事前に進行についての案内を徹底したりすることは，世界同一条件での実施という原則と抵触してしまう．

もちろん，今回のテーマ設定が「ふつうの市民」が限定された時間や手法の中で話し合うのに適したものだったのかという方向の批判もありうる．この点の詳しい検討は本稿の主題から外れるが，気候変動に関する目下の国際交渉に市民の意見を反映するというWWViews全体の目的と照らせば，会議で扱われた四つのテーマや，そのもとでの質問項目は，大筋で妥当なものであったと言えよう．国際交渉の舞台に上がっている議論との関連性を確保するという条件のもとでは，いきおいテーマの難易度は高くならざるを得ない．「ふつうの市民」の参加ということについても，参加者募集が各国で本当に同じ条件で行われたのかということも含め，妥当性について検証が必要であろう．とはいえ，この話題に深い利害関係や専門知識を持たない人たちが参加して議論することの意義を認めるならば，この点についても，今回の設計に重大な欠陥があったとは言いがたい．

そこで，当座検討すべき問題は，「国際的に統一された手法で」という条件を満たしつつ，「ふつうの市民」が，目下の国際交渉の議題となっている「難しい問題」について，少しでも身近に感じながら議論することは，いかにして可能かという点に絞られる．

6.2 ファシリテーターの役割を再考する

このトリレンマは，次のようにも言い換えられる．地球規模で展開する市民参加プロジェクトの意義を十分に踏まえつつ，個々の参加者の持つ経験や文脈と，会議のテーマとの間に，いかに橋を架けることができるか，と．今回の設計の大枠を前提とすれば，この役目を同時に果たしうる存在は，グループファシリテーターであったと思われる．

参加者と会議のテーマとの間に実際どのような橋渡しが必要かは，個別の参加者を目の前にしてみなければ分からない．地球規模で展開する市民参加プロジェクトの意義や方法を深く理解し，会議テーマについても一定の見識を有する（が，直接の利害関係者や専門家ではない）立場から，個々の参加者の声に耳を傾けつつ，参加者の生活知や経験知と会議テーマとの間を媒介することができるのは，コミュニケーションの専門家として各グループに密着するファシリテーターしかいないだろう．

今回の会議では，ファシリテーターは情報提供資料に含まれている内容を越えて情報提供や解説をしてはいけない，というルールがあった．そのため，参加者は物足りなさを感じ，ファシリテーターの側にも「情報提供できないことで市民感覚（各人の経験や具体的イメージ）と接続させてあげられなかった」（Dさん）というもどかしさが残った．この点については，情報提供資料をベースにしながらも，ファシリテーターが自分の持っている情報の範囲内で参加者の質問に答えたり，参加者の経験や関心に寄り添う形で情報提供資料の解説をしたりするなどの改善策がありえるだろう．これらは，今回の統一ルールにおいても完全に禁止されていたわけではなく，いわばグレーゾーンにあったと言えようが，本来はむしろ積極的に推奨されるべきだったのではないか．

ここで提起しているのは，軽微なルールの修正の話ではない．考えるべきはファシリテーターの役割についての視点の転換ないしは拡張である．

WWViewsの統一ルールが想定していたファシリテーター像は，いわば〈中立の進行役〉であった．議論の内容について踏み込んだ意見を述べたり，情報提供をしたりすることに極めて禁欲的であり，議論の内容から超然として，プロセスに徹するという姿である．日本会場に関して言えば，18グループの進行を担当したファシリテーターは，今回のルールに沿って，〈中立の進行役〉としてのファシリテーターを忠実に務めた．参加者からの高い評価は，その信頼の証左と言えよう．その反面，参

加者の生活経験と会議テーマとの橋渡しという点では物足りなさが残った.

そこで,〈中立の進行役〉に代えて（あるいは加えて）導入すべきだと考えるのは,〈媒介の専門家〉（小林 2004, 329）としてのファシリテーター像である.〈媒介の専門家〉とは，日本におけるコンセンサス会議の導入に深く関わった小林傳司が，この種の市民参加型会議に専門知識や情報を提供する「専門家」との対比で，会議の企画運営や進行に関与する自らの役割を定義する際に導入した概念である.

媒介の専門家は，会議の進行だけに責任を持つのではない.「必要に応じて市民パネラーに発言をうながし，追加の質問を専門家に発するという役割を果た〔すという〕意味で,〔中略〕会議のテーマに関するある程度の知識を必要」（小林 2004, 329）とされる立場である．また，どのようなテーマを扱うかということも含めて，この種の会議の意義に関する見識も要求される．小林によれば，市民参加型会議から生まれる提言や報告書には，それらがいかなる討議を経て生まれたものであり，現実の政策形成にどう活用されるべきかの分析を付け加える「知的加工」の作業が欠かせず，そうした知的加工も〈媒介の専門家〉の重要な役割となる[8].

知的加工という言葉で小林が主に指し示していたのは，出来上がった提言・報告書を政策過程につなぐための注釈であった．しかし，知的加工は市民参加型会議の企画運営のあらゆる段階に求められることであろう．会議のファシリテーションも然りである．今回のWWViewsで言えば，参加者の生活経験や実感と，会議のテーマである国際交渉のアジェンダとを橋渡しすること，そのために情報提供資料に書かれていることを分かりやすい言葉で言い換えたり，必要な情報を補足したりして解説すること，参加者の提言が国際交渉の展開に実質的な関わりを持つものとなるよう，議論や文章作成を支援することがそれにあたる．参加者がファシリテーターに期待し，多くのファシリテーターもそれに応えたいと考えた役割は，まさにここで言う知的加工であった.

こうした視点の転換・拡張は，市民参加型会議の品質の評価にも変化を迫る．Horlick-Jonesら（2007）は，英国で2003年に行われた遺伝子組換え作物に関する市民対話“GM Nation？”を例に挙げ，ここでいう知的加工が会議の中でいかに行われたかの分析を試みている．その分析の前提には，市民参加型会議の実践は手続き上の公平性や効率性の観点からは盛んに評価されてきたが，会議において，様々な情報源や知識がいかに効果的に用いられたかという意味での「翻訳の質」（translation quality）を評価することは十分になされてこなかった，という指摘がある．会議を「組織プロセス」（organizational processes）（Horlick-Jones et al. 2007, 261）として捉え，その手続きがいかに効率的に進められたかという観点だけでなく，会議準備を含めた企画運営の各段階で，知識・情報がどのように翻訳されたかを評価する視点，すなわち「情報システム」（information systems）（Horlick-Jones et al. 2007, 261）として会議を捉える視点が必要だというのである．WWViewsの統一ルールは，ことグループファシリテーションに関して言えば，前者を強調したものであり，後者の視点は希薄であったと言えよう.

今回，グループファシリテーターが，ルールに沿って抑制的に振る舞わざるを得なかったことに対しては，参加者，そして当のファシリテーター自身からも，もどかしさや物足りなさが表明された．それはグループファシリテーターの役割を拡張すべきであるという要望であって，以上考察してきたように十分な理由があったのである.

7. おわりに

ファシリテーターが媒介の役割を積極的に担うことは，非意図的なものも含め，議論の誘導につながる危険と隣り合わせである．小林も，コンセンサス会議の経験から「ファシリテーターが『媒介』

の役割を果たすということは,『誘導』につながる」(小林 2004, 330)と述べている．WWViewsのファシリテーターの一人は,「資料集のどの点を指摘するかによって（指摘の順番によっても），意見が目の前でコロコロ変わるのを何度も目撃しました」(Jさん）と述べ，ファシリテーターによる恣意的な誘導の危険性を指摘した．関連する別の問題として，当該テーマに関する専門家や利害関係者ではないファシリテーターが，媒介の役割を果たすことができるには，具体的にどのような知識の備えを求めておくべきなのか，というポイントもある．

こうした問題に対して，今回のWWViewsの経験から一義的に答えを出すことは難しいが，事後の質問紙調査で参加者の一人が述べていた次のような感想は示唆的である．

「『素人』同士ということで，高校レベルの授業での知識やニュースなどの情報を，どの程度話すのが『素人』なのかを考えてしまい，自分の考えを抑えていた部分もありました」(20代女性)

これは一人の参加者の感想であって，一般化には慎重であるべきだが，ファシリテーターが〈中立の進行役〉として振る舞い窮屈さを感じているのと同じように，参加者も自分の意見を抑制して「素人」を演じていた, という指摘である．これは, 好ましい状態とは言えまい．この参加者が「素人」を演じていた，という理由は必ずしも明らかではないが，グループ討論の環境を整えるという意味では，やはりファシリテーターが中立の仮面を取り，媒介者として，参加者に向き合える枠組みをつくることが必要なのではないか．

ファシリテーターが自分の意見を参加者に押し付けたり，勝手に結論を決めてしまったりすることは，論外である．間違った情報や明らかに偏った見方を提供することもルール違反であろう．それらを排除し，適正なファシリテーションが行われるようにするためにはどうすればよいか．前章までの検討に沿って考えれば, 形式的な中立性のルールを掲げるだけでは不十分であり, むしろファシリテーターの行う支援行為の内容に踏み込んだ検証が必要である，ということになろう．本稿で提案しているようにファシリテーターを〈媒介の専門家〉として位置づけなおすとすれば，少なくとも，ファシリテーターがファシリテーションの過程で行った情報提供や資料の解釈などの媒介や翻訳の内容を，観察者，評価者の役割を担うスタッフが記録にとどめ，後の検証に備えることが必要である．この記録を使い，外部の専門家や会議参加者の協力も得つつ，ファシリテーターの媒介が誘導に陥らず，適切に行われたかの検証を事後に行うことが,（検証のための基準を，どう設定するかという問いは残るが）前章までの考察からなしうる実践上の提案である．

最後に，こうした記録と検証の手続きや，ファシリテーターが会議テーマについて備えておくべき知識の問題も含めて，ファシリテーターの役割に関する国際的に統一した運用をいかに行いうるのか, という問題は依然として残る. ここで〈媒介の専門家〉として積極的に位置づけたファシリテーターの役割は，どのような形で，国際的に共通化した実践の指針として提示しうるであろうか．地球規模のリスクをめぐって，今後もWWViewsのような市民参加型の科学技術コミュニケーションのプロジェクトが続けられるとすれば，この点は，今回の経験から見出された一つの貴重な宿題と言えるであろう[9)]．

謝辞

WWViews in JAPANに参加いただいた105人の皆様，運営スタッフ，ファシリテーターの皆様，企画運営への助言を頂いたアドバイザリーボードの皆様，ご支援を頂いた企業・団体の皆様を始め，このイベントの実施に関与された全ての方々に感謝申し上げます．本稿作成にあたり，大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの八木絵香氏，山内保典氏，春日匠氏には，事後調査データの提供や草稿に対する助言を頂くなど，大変お世話になりました．この場を借りてお礼申し上げます．

本稿は，科学技術振興調整費新興分野人材養成プログラム「科学技術コミュニケーター養成ユニット」およ

び科学研究費補助金若手研究（B）「科学技術の参加型評価手法の理論的基礎の解明および実用化支援ツールの開発」（課題番号：21700839）による成果の一部である．

注

1）World Wide Viewsの全体像に関しては，World Wide Views in JAPAN実行委員会のウエブサイト（http://wwv-japan.net/）を参照．

2）ファシリテーションの技法や考え方について，実践例を交えながら解説している代表的なものとして中野（2003），中野他（2009）を参照．また，中野・堀（2009）は，日本でファシリテーションの実践や普及をリードしてきた二人の著者が，ファシリテーションの実践家が現場で抱える様々な問題について，対談形式で論じている．

3）小林（2004）は，日本にコンセンサス会議が導入された当時，企画運営者，ファシリテーターを務めた立場から，コンセンサス会議の経過を報告しつつ，その意義や課題を論じている．そのため，科学技術コミュニケーションにおけるファシリテーター論として読むこともできる．森岡（2007），杉山（2007）は，北海道で2006年から07年に行われた遺伝子組換え作物に関するコンセンサス会議を事例として，コンセンサス会議の円滑な進行のための会議設計やファシリテーション上の工夫，参加者間の議論の深めるための支援体制のあり方について考察している．

4）関連する文献は多いが，近年の代表的なものとしてRowe and Frewer（2000, 2004, 2005），Rowe et al.（2005）を参照．また最近の研究として，Rowe et al.（2008）は，市民参加の実践に関する規範的な評価枠組みの有効性と限界を，2003年に英国で行われた遺伝子組換え作物に関する全国的な市民対話“GM Nation?”への参加者アンケート結果をもとに検討している．

5）地球規模の課題をめぐって，専門家や政策決定者による議論の空間と市民の生活世界とを橋渡しする活動は，厳密に言えば，「科学技術」コミュニケーションに固有のものとは言えない．例えば人権や雇用など，科学技術に比較的関連が薄いと思われる分野でも，同様のコミュニケーションが求められることはあり得るからである．したがって，本稿は，科学技術に関わる主題をコミュニケーション活動の対象にすることから固有に生じる問題を，必ずしも直接扱うものではない．一方で，科学技術が，グローバル化の促進や地球規模での多くの課題の解決にとって，主たる要因の一つとなっていることも否定できない．本稿は，そのような観点から，地球規模での課題をめぐって国際的に共通の枠組みで市民参加を進めようとする試みを，科学技術コミュニケーションに（必ずしも固有ではないが）特徴的な新しい領域と捉え，論じるものである．ここで得られる知見は，他分野での市民参加型コミュニケーションを地球規模に展開しようとする際にも，参考になるものと言えよう．

6）日本会場でグループ討論の進行を担当したファシリテーターは次の20人であった（敬称略，*印は補欠）．寿楽浩太，神里達博，宮入隆，伏見和弘，横川修，水野洋子，関嘉寛，伊藤真之，新海洋子，濱田志穂，森岡和子，杉山範子，西修，永井克治，丹羽陽子，大滝あや，東末真紀，川中大輔，中村征樹*，菅磨志保*．

7）ここで紹介している提言への評価は，あくまでも，事後の質問紙調査を実施した時点（会議の約1か月後）のものである．参加者の中には，当日は提言に満足していたが，後日，他国の提言と比較するなどして再考した結果，日本会場での提言を厳しく評価するに至った人もいる可能性がある．

8）ちなみに小林（2007）は，こうした市民提案の知的加工の担い手として，人文・社会科学系の研究者が関与することを提案している（小林 2007, 256-257）．

9）本稿は，筆者のWWViews in JAPAN実行委員としての活動経験を踏まえているが，ここで示した見解は筆者の私見であり，同実行委員会や所属機関を代表するものではない．なお筆者は，同実行委員の杉山滋郎氏と共同で会議全体のチーフファシリテーターを務めたほか，事前の準備段階においては英語版の共通マニュアルの日本語訳やファシリテーターの研修などを担当した．

●文献：

北海道大学CoSTEP編著 2007:『はじめよう！科学技術コミュニケーション』ナカニシヤ出版.

Horlick-Jones, T., G. Rowe, and J. Walls, 2007: "Citizen Engagement Processes as Information Systems: the Role of Knowledge and the Concept of Translation Quality," *Public Understanding of Science*, 16 (3) : 259-78.

小林傳司 2004:『誰が科学技術について考えるのか：コンセンサス会議という実験』名古屋大学出版会.

小林傳司 2007:『トランス・サイエンスの時代：科学技術と社会をつなぐ』NTT出版.

松田健太郎 2008:「日本のサイエンスカフェをみる：サイエンスアゴラ2007でのサイエンスカフェポスター展・ワークショップから」『科学技術コミュニケーション』3: 3-15.

森岡和子 2007:「コンセンサス会議における円滑なコミュニケーションのための考察:「遺伝子組換え作物の栽培について道民が考える『コンセンサス会議』」を事例として」『科学技術コミュニケーション』1: 96-104.

中野民夫 2003:『ファシリテーション革命：参加型の場づくりの技法』岩波書店.

中野民夫・堀公俊 2009:『対話する力：ファシリテーター23の問い』日本経済新聞出版社.

中野民夫・森雅浩・鈴木まり子・冨岡武・大枝奈美 2009:『ファシリテーション：実践から学ぶスキルとこころ』岩波書店.

Rowe, G. and L. Frewer, 2000: "Public Participation Methods: a Framework for Evaluation," *Science, Technology & Human Values* 25 (1) : 3-29.

Rowe, G. and L. Frewer, 2004: "Evaluating Public-participation Exercises: a Research Agenda," *Science, Technology & Human Values* 29 (4) : 512-56.

Rowe, G. and L. Frewer, 2005: "A Typology of Public Engagement Mechanisms," *Science, Technology, & Human Values* 30 (2) : 251-90.

Rowe, G., T. Horlick-Jones, J. Walls, and N. Pidgeon, 2005: "Difficulties in Evaluating Public Engagement Initiatives: Reflections on an Evaluation of the UK GM Nation? Public Debate about Transgenic Crops," *Public Understanding of Science* 14 (4) : 331-52.

Rowe, G., T. Horlick-Jones, J. Walls, W. Poortinga, and N. Pidgeon, 2008: "Analysis of a Normative Framework for Evaluating Public Engagement Exercises: Reliability, Validity and Limitations," *Public Understanding of Science*, 17 (4) : 419-41.

杉山滋郎 2007:「遺伝子組換え作物コンセンサス会議への所感と提言」『科学技術コミュニケーション』1: 105-111.